

報道されない現実 1年後の福島

インキュベクス株式会社特派員が語るいわきの姿



Photo by "K.Watanabe"

いわき市久之浜。

福島県いわき市の最北に位置する港町の、これが震災1年後の姿だ。

あの東日本大震災から1年を迎える前日、3月10日を私は馴染み深い福島県いわき市で迎えた。

水産加工業で賑わった過去が、まったく見る影もない荒地へと変わっている。

この港町に、こんなに広い道はない。ここは一面、海産物の加工場や倉庫があった場所なのだ。

震災直後にあった瓦礫こそ撤去されたが、剥き出しの土もそのままに、溜まった雨水で足を踏み入れるのも躊躇うほどだ。

海からの風が何もない町跡を吹き抜け寒い。

原発から約30キロのこの場所に動く人影は無い。



久之浜に足を運ぶ前、かつて賑わった新舞子の飲食店跡を出発点に選んだ。

ここはオーシャンビューが魅力で人気の場所だったが、今では袋詰めにした瓦礫が山のように積み上げられていた。もはや、袋の下に元々何があったのかすら思い出せないほど、風景は無残に変わってしまっていた。袋の山は減っていく様子どころか、動かされた形跡すらない。

かつての賑わいが嘘のように誰もいない。もっと南には営業している店などもあったが、特産品であった魚がもう食べられないのだ。お客が来るはずもない。

新舞子の手前では地域の人かボランティアだろうか、数人が公園の除染作業をしていたが、他に動いている人はいなかった。

新舞子を離れ、漁港として有名な四倉港へと向かう。
どこも瓦礫の山ばかり。コンビニ以外に町らしいものはない。

道路は一応走れるが、完全には復旧されていない。
あちこちが波打っていて、広い道から一つ角を曲がれば、たちまち無数の陥没や突き出たマンホールが目に入る。

四倉港は沈んでいた。岸壁そのものが波打ち際に沈んでいるのだ。

地盤沈下で海側へと傾いているのだが、今までの風景からわずかに数メートル海が高く見えるだけで、こんなに怖いものとは思わなかった。波が高く見えるのも気のせいではないだろう。何しろテトラポットなどもすべて流され、波を遮るものは無いのだから。



同じく四倉港の中には、何隻もの漁船が折り重なっている場所があった。

写真に写っていない場所にも漁船が累々と打ち棄ててある。

復興は本当に進んでいるのだろうか？

いや、進んではまい。少なくとも私が見てきた場所の復興は進んではないのだ。

道路などからは確かに瓦礫がどけられている。しかし、それだけで片付けられた訳ではない。



新しいものもできていない。

ただ町とその思い出の跡地だけが、ぽっかりと空間を開けているだけなのだ。



ふと思い立ち、行ける限界まで行ってみようと、国道6号線を北へ向かった。

もともと人がいなかったのが、さらに減っていく。すれ違う車がまったくゼロになったのではないかと思った時、何台かがUターンしようとしている場所が現れた。
Jヴィレッジだ。

原発内作業の前線基地となっているこの場所は、一般人が立ち入れる北限ともなっている。
物々しい検問に警察車両、警官が多数。
ここ、いわきで始めてと言ってもいい大勢の人間がいる場所が、この検問だった。

もちろん私は車をUターンさせざるを得なかったが、棘のようなものが心に残る。
私たちの愛するいわきは、どうなるのだろう？
Jヴィレッジの検問のように、進むことを諦めなければならないのか？
復興の道を、途中で引き返さなければならないことにはならないのだろうか？

そんなことはできない、絶対に復興を成し遂げなくてはならない。
そう心に誓いながらも、私は暗い気持ちのまま、復興の進まぬいわきの町へと引き返していった。